

第二章 関東地方の塔

第 6 番 日光東照宮五重塔

栃木県日光市山内

世界遺産になった日光東照宮の中に、東照大権現を祀った五重塔があると知り、早速出かけました。東武浅草駅から特急に乗り1時間50分で東武日光駅に到着します。駅からバスで7分、西参道で下車し、20分程歩いたところに五重塔があります。

日光東照宮は、家康の遺言により、二代将軍秀忠公が、元和三年（1617）に日光廟を建て、駿河に葬られていた徳川家康の遺骸を移し、八州の鎮守としました。その後東照宮大権現の神格を賜り神として祀ったことに始まっています。家康は、日光が江戸のほぼ真北にあたり、北極星の位置から徳川幕府の安泰と日本の恒久平和を守ろうとして遺言したそうです。



三代将軍家光公は、徳川家の権威を誇示するため、「寛永の造改替」と称し、今見るような絢爛豪華な建物に建て替えを行いました。木立の中に立つ現在の塔は、小浜藩主酒井忠勝により寄進された塔が落雷により焼失したため、子孫の酒井忠進によって文政元年（1818）再建されたものである。大工棟梁は若狭藩御用達大久保喜平次で、丹精に彩色され金箔に飾られた、江戸風を代表する絢爛華麗な塔で、一辺 4.85m・総高 31.8mであります。組物は、初～四層が和様三手先で五層は禅宗様の三手先、軒は四層までが二軒繁垂木の平行垂木ですが、五層は扇垂木になっています。贅はつくされているが形の面から言えば、塔身部が細長く、相輪は短小で、逓減率も小さく不安定で、格好の悪い塔の部類に入ります。いくら装飾が華やかでも、形が悪ければ、「錦は着ても、猿は猿」ってどこか。若干いいすぎかもしれませんが、同じ山内に「陽明門」という非常に絢爛豪華な建物があるが故に、たいていのものが霞んでしまうためかも知れません。

第 7 番 独鈷山普門院西明寺三重塔 一真言宗豊山派一

栃木県芳賀郡益子町

真岡線の益子駅で下車し、約 4km 離れた高館山の麓に普門院西明寺があります。寺伝によれば、天平九年(737)行基菩薩の草創で、紀有麿呂によって建立され、天平十一年落慶供養が行われたと伝えられています。大治二年(1127)に兵火で焼失したが、治承二年(1178)に再興し、承元三年(1209)には宇都宮景房により本堂が修理され、さらに建長七年に最明寺入道時頼により七堂伽藍が再興され、寺名も西明寺と改められました。明応元年(1492)には楼門が、天文七年(1538)には三重塔が益子宮内大輔家宗により、建立されました。その後、元禄十四年(1701)には平野亦市発願により本堂から閻魔堂、鐘楼と建立され、現在に至っています。坂東霊場第二十番札所として現在も親しまれている古刹です。

左右を椎の木立に囲まれて、昼なお暗い石段の参道を登ったところに茅葺き屋根の古風な楼門があり、すぐ左手に三重塔が立っています。楼門は、純唐様式三間重層入母屋造り茅葺きです。柱は32角造りで左右の側室には仁王像が安置されています。

三重塔は、和様と禅宗様が折衷された三間三層造り、目板打の板屋根銅板葺きで、初層の一辺は 3.6m、高さは 17.6m です。勾欄のない縁をめぐらし、組物は初・二層を和様三手先、三層を禅宗様の三手先としている。軒周りは初層が二軒平行繁垂木で、二・三層が二軒扇垂木である。屋根を長板のシコロ葺きにして重く感じさせ、塔身部を細長く見せています。

閻魔堂には、何故か笑っているような表情に感じられる閻魔様が鎮座しています。何を笑っているかは、拝む人によって意味は違うはずです。それ故に人気があります。



第 8 番 施無畏山小山寺三重塔—天台宗—

茨城県西茨城郡岩瀬町

関東地方以北で最古の塔が岩瀬町にあると知り、早速巡礼しました。水戸線岩瀬駅から参道に続く一本道を、車で15分弱いくと山の中腹の斜面を切り開いた、木立の中に小山寺があります。仁王門をくぐり、石段を登ると右手に向拝に立派な彫刻の施された本堂が見えてきます。左手には三重塔があります。

小山寺は、富谷観音と呼ばれ天平七年（735）行基が開創したと伝えられ、南北朝時代に一時荒廃しましたが、結城氏や多賀谷氏の庇護を受けて復興しました。本尊は、十一面観音で蛇彫様式による檜材一木作りで、行基作、脇侍不動尊は慈覚大師の作、多聞天は運慶の作と伝えられています。本堂は、四柱造りで江戸時代に再建されました。

三重塔は、室町時代・寛正六年（1465）の建立で、建立者は多賀谷朝経、大工は宗阿弥家吉とその息子であることが確認されています。逆蓮頭勾欄付縁をめぐらし、中央間は板唐戸、脇間は菱格子窓を備えおり、二・三層の縁には跳勾欄を設けている。軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木で、屋根は軽快に反り、組物は拳鼻をつけた和様三手先で、尾垂木入りの伝統的な手法が用いられています。一辺 4.16m・総高 21.4m で、屋根はとち葺き、おおむね和様の繊細で流麗な美しさを有する塔であります。



第 9 番 五徳山水澤寺六角二重塔—天台宗—

群馬県北群馬郡伊香保町

伊香保温泉の近くに珍しい手押しのマニ車のついた六角形の二重塔があると知り、巡礼しました。

水沢寺は、高崎駅から箕郷経由伊香保行きバスに乗り、水沢で下車するとすぐに参道です。参道の石段を登ると華麗な彫刻が施されたど派手な仁王門があり、仁王尊と風神・雷神が祀られています。極彩色の楼門は、天明七年に建立されたもので、銅板葺き重層入母屋造りで上層には釈迦三尊が安置されています。

坂東観音霊場第十六番札所で水沢観音の名で知られています。本尊は十一面観音で、一切の願いを融通することから「融通観音」と称されています。

六角二重塔は、石造りの基壇の上に立ち、六本の柱には粽が入り、全体的に禅宗様で統一されています。組物は初層を出組、二層三手先で、軒は二軒繁垂木を扇状に配しています。

内部には回転する六地藏尊を安置した、日本における地藏信仰の代表的建物です。即ち、六地藏尊自体が、回転する構造になっているのが珍しい形です。初層には、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道の六道を守る地藏尊を祀り、六道輪廻の相を表し、二層には大日如来が安置されています。



第 10 番 金鑽神社多宝塔

埼玉県児玉郡神川町

金鑽（かなさな）神社は、武蔵国二ノ宮にあり、景行天皇の時代に、日本武尊が東征凱旋の時、火打石を御霊代として御室山に鎮座し、天照大神を祀ったのが創建とされています。

八高線の丹荘駅から一時間ほど歩くと神社の鳥居前に到着します。

神社に本殿はなく、拝殿のみで、御室が嶽を御神体として崇拝している数少ない神社の一つです。

「カナサナ」というのは、金砂の義であり、製鉄にちなむ地名であります。奈良・平安時代には、この地域が文化の中心地で、それ以降、武蔵七党の児玉一族の崇敬を受けて近隣地区に強い影響力を持ってきました。



境内には、武蔵七党の丹党に属した安保弾正全隆が 1534 年に建立した柿葺き屋根、総朱塗り、一辺 3.98m・高さ 13.5m の多宝塔があります。山裾の木々に包まれてひっそりと建っています。

また、山の中腹には、恐らくこの神社のご神体としてあがめられたであろう鏡石と名づけられた岩があります。約一億年前の断層活動に伴う摩擦により表面が鏡のように磨かれた高さ 4m・幅 9m・傾斜 30 度の珍しい岩です。

宮大工のざれごと① “間違い” のもと

大工に伝わる戯れ歌に「一分二分なら・・・、一寸違って寸違い、一尺違って尺違い、一間違ってほんとの間違い」というのがある。建物という間は、長さを表す意味と柱間を表す意味の二通りがあり、また桁行きと梁間の柱間は、建物の構造によって一定でなく、中央間が大きく、両脇間が小さめになることがあります。

建物を図面どおりに構築するには、個人の技能とチームワークが大切であり、誰かが勘違いして、一間を数え間違えると間違い、一間抜かずと間抜けとなり、とんでもない結果をもたらすことがあります。

第 11 番 正中山法華経寺五重塔—日蓮宗—

千葉県市川市中山

日蓮が初めて法を説いた地・法華経寺に、本阿弥家の本願によって加賀前田家が寄進建立した五重塔があると知り、早速出かけました。法華経寺は、下総中山駅から北へ黒門をくぐり、ゆるやかに上がる門前町の奥にあります。さらに山門をくぐって参道を進むと、両側には塔頭寺院が連なって、喧騒を離れた静かな聖域の感じがします。参道奥の左手にある祖師堂は、江戸時代に建てられたもので、屋根を二つ並べたような比翼入母屋造りで非常に珍しい形式の建物です。

この寺は、建長六年（1254）にこの地の領主富木常忍が建てた法華堂と、中山の領主太田乗明がその館を改めて寺にした本妙寺の二つが、元徳三年（1331）に合併し、日蓮自ら釈迦牟尼仏を安置し開堂入仏しました。もうひとつの特色は、「立正安国論」「勸心本尊抄」のほか日蓮真蹟遺文や聖教類を始祖の日常が収集と保存に努め、現在まで連綿と保管されています。

五重塔は、元和八年（1622）に本阿弥家の本願により加賀前田家が寄進建立したもので、和様を主体とした一辺 4.86m・総高 33.3m であります。基壇を設けず、勾欄のない縁をめぐらし、二層以上に勾欄をめぐらせています。組物は和様の三手先で、軒は初層から四層まで二軒繁垂木の平行垂木とし、五層のみを扇垂木としています。江戸期としては珍しく装飾が少ないが、初層の拳鼻の部分には、禅宗様の鳥の嘴の形を用い、外回り木部は弁柄朱を塗り、軒の出が少なく細長い感じであるが、全体としては古様で安定感があります。



第 12 番 成田山新勝寺三重塔—真言宗智山派—

千葉県成田市成田

新勝寺は、成田不動の名でなじみ深く、平将門の乱を鎮めるため勅命を受けた寛朝僧正が、神護寺にあった不動明王像を奉じて一字を建立し、安置したことから始まったとされている。

石段を登ると大提灯が下がる仁王門があり、それをくぐり更に石段を登りきると、左右に翼殿を持つ重層入母屋造りの大本堂が視界に入ってきます。本堂右手には、三重塔と鐘楼があります。左手には、釈迦堂があり、安政五年に建立された前本堂です。歌舞伎役者の初代市川団十郎が成田不動に帰依して「成田屋」の屋号を名乗り、不動明王が登場する芝居打ったことなどもあいまって、江戸期に成田不動は、庶民の信仰を集め、成田参詣が盛んとなった。その後も市川団十郎を名乗る歌舞伎役者は、代々成田山信者として続いている。

三重塔は、薬王院と同じ桜井瀬左衛門安信の作で、一辺 4.32m・総高さ 25.0m、おびただしい彫刻装飾が特色で、正徳二年（1712）に建立されました。擬宝珠勾欄付縁をめぐらし、中央を棧唐戸、脇間は十六羅漢の羽目板張り、地文彫の柱や長押に漆・極彩色を塗り、要所は金具で荘厳されています。各層とも尾垂木は金色の龍頭丸彫り、軒裏は垂木のない板軒を用い、前面に彩色雲水紋を施している。全体に漆・極彩色を塗って、要所は金具で飾られた江戸中期以降に見られる装飾過多のはしりの遺構として注目される。塔内には五知如来を安置し、相輪には四方に宝鈴付の宝鎖を下げています。この他塔としては、昭和 59 年に完成した RC 造の巨大な大塔があります。



第13番 長安山石堂寺多宝塔—天台宗—

千葉県安房郡丸山町

房総の丸山町の石堂寺に、東日本では数少ない重要文化財に指定された多宝塔があると聞き、出向いていきました。

南三原駅から車で10分弱の丘の上にあり、江戸時代建立の仁王門をくぐり、小さな坂道を登ったところに室町時代（1513）に建立された唐様・寄棟造りの本堂があります。石堂寺は、今から約1300年前の和銅元年に奈良の僧恵命・東照が秘宝アショカの王塔を護持してこの地を訪れ、草庵を結んでこれを祀ったのが始めといわれています。また、近江の阿育王山、上州の白雲山とともに、日本三石塔寺に数えられてきました。天台座主慈覚大師円仁が来られ七堂伽藍を造営し、天下に偉容を誇りました。しかし、



文明19年の出火で焼失し、その後住職宗海法師が、領主丸氏の助力によって大永5年（1525）堂宇を再建したといわれています。時期になると牡丹の花がとても綺麗なようです。その他境内は、梅・桜・紅葉の美しい花の寺です。

本堂の横に、室町時代（1545）に建立された一辺4.17m・総高約13mの多宝塔があります。内部には、運慶から1～2代あとの慶派仏師の作と思われる千手観音像が祀ってあります。像高1mの座像で、檜の寄木造です。この時代に、当寺で養育された足利頼氏の幼名「石堂丸」にちなみ、「石塔寺」から「石堂寺」に改められたという。

寛政三年（1791）武志伊八郎作＊の「波雲に鶴」と題するすばらしい彫刻が本堂内にあります。

注記：別名「波の伊八」といわれる江戸末期の名彫刻師で、「房州に来たら波は彫るな」といわれたくらいすばらしい波の彫刻で有名です。

第 14 番 旧東叡山寛永寺五重塔—元天台宗—

東京都台東区上野

東叡山寛永寺は、徳川三代将軍家光が喜多院の天海の勧めを受けて造営したことに始まります。天海は、上野の地が江戸城の鬼門にあたることを進言、京都御所が鬼門にあたる地に比叡山延暦寺を配しているように、不忍池を琵琶湖に見立て、寛永寺が草創されました。



五重塔は、もとは上野東照宮に属し東照大権現を荘厳するために建立されたもので、仏教本来の意図からは逸脱したものである。寛永八年幕府重臣土井利勝の寄進で建立されたが、同十六年（1639）に焼失し、直ちに再建されました。この塔は、一辺 4.85m で総高 36.4m・塔形式は純和様・屋根は五層のみが銅板瓦葺き、他は本瓦葺きと変則ですが、全体的に伝統的な作りです。大工は、甲良宗広・宗久父子とされています。初層は勾欄のない縁をめぐらし、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木とし、組物は和様三手先を用いています。心柱は、礎石から立ち上がる通し柱方式になっています。明治維新の戦禍により、上野全域に立ち並んでいた堂塔のほとんどが、焼け落ちてしまいました。さらに、神仏分離令により不思議にも焼け残った五重塔は、東叡山寛永寺の管轄になり、現在、東京都上野公園の管轄になってしまいました。従って、五重塔の全貌は上野動物園に入園しなければ明らかにならないことは、非常に残念であります。せめて動物園側からは、区画して上野東照宮側から入れるようにしてほしいと願うのは私だけだろうか。

第 15 番 長栄山本門寺五重塔—日蓮宗—

東京都大田区池上

長栄山本門寺は、日蓮宗の大本山で、寺内には安藤広重の絵にもなった総門、多宝塔、経堂、五重塔等があります。日蓮が、病氣治療のため身延山を下り湯治に行く途中池上宗仲邸に立ち寄ったが、ここで死去しました。日蓮の死後、宗仲が自分の邸を寄進し、日蓮の直弟子の日朗を中心に寺院の建立が推進され、本門寺ができあがりました。

総門をくぐって九十六段の石段を登ると、正面に本堂があり、右手前奥に五重塔が桜の樹に囲まれて建っている。この塔は、二代将軍秀忠の乳母岡部局の発願、幕府作事方大工頭・鈴木近江之守長次によって、慶長十二年（1607）に建てられたものであります。基壇の上に立ち、縁はめぐらしていません。

軒は、全層とも二軒繁垂木ですが、初層のみ平行垂木、他の層は扇垂木です。組物も初層は和様三手先、その他の層は禅宗様三手先です。二層以上の尾垂木には、竜頭の彫刻が入っています。一辺 4.85m・総高 29.5mで、初層は和様で二層以上は禅宗様とした特徴をもっています。



宮大工のざれごと② 几帳面とは

柱は、円柱と方柱があるが、寺社建築では円柱が基本であります。裳階柱や庇・向拝などに方柱をもちいます。平安時代後期になると、角材の四方の角を 45 度方向に削って面をとる切面という手法が現れます。それ以降発展して、隅入・唐戸面・几帳面なる手法が現れました。なかでも几帳面は、方形の角を撫角に削りその両側に段をつけたものをいい、屏障具の一つの几帳をささえるための柱に用いられた手法です。この面取りの形を几帳面といい、すみずみまで気をつけきちんとする様をいうことになった。

宮大工の知識―Ⅱ 仏堂の間と面

仏像を安置する堂の、およその規模を表すのに、正面柱間の間数をとって何間堂といい、原則奇数間となります。まぎらわしいのは、平面規模を表す表記方法です。表示方法は、時代によって異なるので注意を要します。

奈良時代は、実寸法の丈・尺・寸で表しましたが、平安時代に成立した間面記法では、次のように理解することが出来る。建物の本体である母屋（身舎）の間口（正面・桁行）で間を表し、その母屋に庇がどれだけつくかを面で表す。母屋の奥行（側面・梁行）は二間（柱間の数で長さの単位ではない。）が基本であるから、とくに表示しません。したがって、三間といえば、正面三間・側面二間の長方形の母屋をさすことになります。

これだけでは、仏堂とするには狭く、厳かさが足りません。そこで正面に庇をつけ厳かにしようとした場合、三間一面といいます。庇はほんらい一間の奥行きですから、庇をつけた場合の奥行きは、足して三間となります。

正面と背面に庇をつけると三間二面になり、正面と両側面に庇をつけると三間三面、さらに背面にもつけると三間四面ということになります。

一間四方の母屋の四面に一間の庇がついた「一間四面」の仏堂は、常行堂や法華堂の規模をちじめて成立した最小規模の仏堂であり、阿弥陀信仰とともに普及した事例です。

鎌倉時代に禅宗様が入り、方三間の本屋に裳階が一周する形が成立しました。また浄土教の発展により、本堂内に多数の門徒が入るための広い外陣のある仏堂も普及してきました。

また室町時代には間面記法のほかに部屋の広さを間で表すようになってきました。住宅建築の場合は柱一間が七尺または六・五尺などときまるため、方一間を一間とし、三間に二間の部屋なら六間となり、現在の坪にほぼ相当するようになりました。

さらに桃山・江戸時代になると、柱間数を桁行・梁間ともに間で表して、「桁行五間・梁間四間」と表示する場合と、桁行を間、梁間を面で表して「五間四面」と表示する場合があります。後者の場合の五間四面とは、平安時代の間面記法でいう、「三間四面の仏堂」と同じ大きさになるのでまぎらわしい。さらに桁行と梁間の間数が同じ場合には、「何間四面」「方何間」という表現もあるのでややこしいので注意を要する。